



アイヌ
叙事詩

ユーカラ集II

“PORO OINA”

(大 伝)

金成まつ筆録

金田一京助訳注

三省堂

N. D. C. 分類番号	8 1 9	前 付	4 ページ
筆 録 者	かん なり 金 成	本 文	478 ページ
訳 注 者	きん た いち きょう すけ 金 田 一 京 助	後 付	2 ページ
筆録者略歴	金成まつ 明治8年11月10日生まれ。18歳より24歳まで函館聖公会伝道学校に在学。卒業後52歳までキリスト教の伝道婦として働いた。55歳後(昭和3年)ユーカラの筆録に従事して現在におよび昭和31年11月3日紫綬褒章を賜わった。昭和36年4月6日没。享年85歳。		
訳注者略歴	金田一京助 明治15年5月5日生まれ。明治40年東京大学言語学科卒業。東京大学教授として「アイヌ語学」「アイヌ文学」等担当。昭和18年停年退官。その後も国学院大学教授として、言語学・国語学を講ず。昭和29年11月3日文化勲章を賜わる。日本学士院会員。文学博士。国学院大学日本文化研究所研究審議委員。主著 アイヌ叙事詩ユーカラの研究2冊。		
本文内容	幌別のポロオイナは崩れているゆえ、その原形を想わせる日高のポロオイナと、カムイオイナを参考に掲げる。日高にはボンオイナが無くカムイオイナのその(4)がボンオイナの異伝であるゆえ序でに掲げた。		



アイヌ 叙事詩 ユーカラ集 II

PORO OINA

大 伝

定 価 1500 円

昭和 86 年 5 月 5 日 初版発行

昭和 89 年 8 月 10 日 再版発行

©

著作権者 国学院大学日本文化研究所
 筆 録 者 金 成 ま つ
 訳 注 者 金 田 一 京 助

東京都千代田区神田神保町1の1

発 行 所 株式会社 三省 堂

代表者 小 倉 正 風

東京都三鷹市上連雀990

印 刷 者 株式会社 三省堂三鷹工場

代表者 小 倉 正 風

東京都千代田区神田神保町1の1

発 行 所 株式会社 三省 堂

電話東京(291)1126代表

振替口座東京54300

(ユーカラ II)

例 言

- 1 「アイヌ^{アイヌ} 叙事詩 ユーカラ集」第二巻は、知里真志保博士病気のため、わたくしの第二冊目 PORO OINA 「大伝」がさきに出ることになった。
- 2 この巻には金成まつ女史筆録の PORO OINA (幌別) のほかに、その注釈の意味で、わたくしの記録した日高の PORO OINA (異伝 I), KAMUI OINA (異伝 II~IV) を参考にあげた。また、日高の KAMUI OINA の中に幌別の PON OINA にそっくりのもの (異伝 V) もあるので参考に添えた。
- 3 本文のローマ字綴りはアイヌ語原文で、女史筆録の綴りに拠るが、たゞ女史は全く自由に書き流されるから、わたくしが、代わって分ち書きをさせてもらったこと第一冊の時と同様である。
- 4 女史筆録の原文の明らかに誤字と思われるものは訂正し、その由を脚注に記した。
- 5 日本語訳はわたくしの逐語訳である。所々まちがいがあったが、知里博士の助力を得て大過なきを得た。
- 6 脚注中 [B] は、Dr. John Batchelor の「アイヌ英和辞典」(東京 岩波, 4版 1938) の所説。
- 7 脚注中, [C] は知里真志保博士説, 『C』 III は同博士の「分類アイヌ語辞典」第三巻・人間篇(東京 日本常民文化研究所, 1954) の所説。
[N] は知里なみ女史説, [M] は金成まつ女史説。
- 8 脚注における I. p. 284, f. n. (2) 参照とは、ユーカラ集第一巻『小伝』の 284 頁, 脚注 (2) 参照の意。
- 9 脚注及び巻末のアイヌ語索引のアイヌ語の綴りは、女史の原文を改め、統一をはかった。例えば p~b, は p にした。
- 10 索引は知里真志保博士をわずらわしてできあがったものである。

口 絵 説 明

I ユーカラのノート整理中の著者

II 金成まつ筆録のポロオイナ

冒頭と最後のページ。

III 日高のカムイオイナ（ポロオイナ異伝 II），新冠の酋長家の 出，サンキロットの伝承。

巨魔モシレチクチク，コタネチクの幽閉から，日の女神を救い出すオイナである。大正四年の秋，紫雲古津村における筆録。

IV 日高のカムイオイナ（ポロオイナ異伝 V），新平賀の巨豪サ ンゲレキの家の嫁，ヤイブニレの伝承。

ポロオイナとも呼んで，称呼は不確かになっていたが，内容は，西浜の神の物語で，ボンオイナそっくりの不思議な伝承であるから，本巻の末に追録した。

見 返 し 説 明

前 ウカリ

正しくはウカル，ウは「相互」，カルは「打つ」，棍棒をもって，交わる交わる打ち合う決闘，ユーカラにもよくあること。手草(てくさ)を手に折り且つ励ます婦は，打たれるものの妻。「時の声」とあるペウタキは，婦女子の発する悲痛な叫喚ペウタンキの訛。

後 メッカ打ち

メッカ打ちは「刀のみね打ち」の意。災難に死ぬものある日，親類が集まって，死者の妻子兄弟など最も親しいものの額を刀のみねで，血を出すほど打って，余殃なからしめるのだという奇習。左側の衣を頭から被っているのは，喪にこまる妻の風俗。

目 次

例 言

解 題	1
梗 概	13
「ポロオイナ」.....	15
「ポロオイナ」異伝	26
I 「ポロオイナ」(日高新冠・サンキロット所伝)	26
II 「カムイオイナ」(日高新冠・サンキロット所伝)	31
III 「カムイオイナ」(日高沙流・タウクノ所伝)	42
IV 「カムイオイナ」(日高沙流・タウクノ所伝)	47
V 「カムイオイナ」(日高沙流・ヤイプニレ所伝)	53
PORO OINA	57
I 発 端.....	59
II 乙女のかげ口.....	74
III かげ口の処罰.....	104
IV 姉神の大訓戒.....	126
V コタネチクチクとの戦い.....	142
VI シヌタブカビとの来援.....	194
PORO OINA 異伝.....	237
I PORO OINA (日高新冠)	239
II KAMUI OINA (日高新冠)	279
III KAMUI OINA (日高沙流)	351
IV KAMUI OINA (日高沙流)	383
V KAMUI OINA (日高沙流)	425
索 引	457

題 解

I

アイヌ叙事詩訳注の手初めに、わたしがオйна (oina 「聖なる伝え」) をまず選んだのは、オйнаは、アイヌ種族の宗教的聖經を成す「神曲」であり、それ自身が粉本となって英雄のユーカラが発生した全アイヌ文学の本源かつ代表であるからである。

オйнаは、全北海道ばかりでなく、カラフトにもある。カラフトのオйнаは、ヤイレスポ (yai-resu-po 「自身を・育てる・児」「ひとりで育つ児」) と呼ばれる半神半人で、その自叙から成る叙事詩である。ヤイレ^{アイヌ}スポは人間の元祖でサクショモアイェプ (sak-somo-aye-p 「夏・言わない・もの」) という蛇体との戦いなどが物語られ、カラフトでは、羽衣伝説もこのヤイレスポにからんで物語られる。

北海道のオйнаのヒーローは、オйнаカムイ (oina-kamui 「聖伝・神」) もしくは、アエオйнаカムイ (a-e-oina-kamui 「われわれ・それについて・仰いで・伝える・神」) と尊称され、時としては、アイヌラックル (ainu-rak-kur 「人間・くさい・かた」) と親しんで呼ばれ、あるいは、ひとりで育てているヤイレスクル (yai-resu-kur 「自身を・育てる・ひと」) のこともあり、あるいは、美しい姉神の手に養われて育てている筋もあるが、何れも、このヒーロー自身の自叙で成る。

数多の「神々のユーカラ」は、人間に害をなすものを懲らしめ、文化の元を開くオキクルミの神話である。それでオキクルミは、殆んどオйнаカムイと似てくるので胆振でも、日高でも、オキクルミがオйнаカムイと同一視されがちである。但しオキクルミにはいつでもサマイクルという兄弟がいて、これと対照的に語られるが、オйнаにはそれが無い所に、ハッキリした別系の説話である痕跡をもつ。

沙流のオキクルミ・サマイウンクルは、所によってはオキキリムイ・

サマイェクル（幌別地方）、オキキリマ・サマイクル（十勝地方）と呼ばれている。胆振から日高地方のサマイウンクル・サマイェクルは、短気で、無思慮で、いらざることを言っては失敗をするのに、オキクルミ・オキキリムイは、思慮深く神を畏れてつつしみ、立派に悪神を平らげ、成功をする。さながら東奥の昔噺「上の爺さん・下の爺さん」、東京の「正直爺さん・意地悪爺さん」と同じ型のアイヌの昔話に、「上の者・下の者ばなし」があるが、それと、そっくりの話になりかゝっている。オキクルミを義経だとする邦人たちは、サマイウンクルを弁慶にしている。

然るに、北部東部地方ではサマイクルの方が強く、往々力競べをしたという大石などが語り伝えられるが、サマイクルの方がいつも勝負に勝っている。

そのみならず、石狩地方などでは、サマイクルは、サマイクルカムイとあがめられ、この世の初まりの神で、樺太のヤイレスポのような巨人説話にまでなっている。知里真志保博士はサマイクルの名をもって、サマニズムに結びつけ、アイヌを導いた昔のサマンだろうと説くあたり、いつもの尖鋭な語原説である。

久保寺逸彦氏は、南海岸地方ではオキクルミをもってオイナカムイと同一視するが、もとは、オキクルミは、神々のユーカラのヒーロー、アイヌラックルは、オイナのヒーローで、おのおの別なヒーローだったろうという一説を出された。

胆振の幌別地方のオイナに、大オイナと小オイナとある。わたしのいわゆる「大伝」「小伝」である。この「小伝」の方が七千句もある最大の長曲で、「大伝」の方はその半分の三千余句に過ぎないのである。

この矛盾は、「大伝」の方はオイナカムイの大功業であるのに、「小伝」の方は、長大ではあるが、事柄がオイナカムイのラヴアフェアに過ぎない。この「事件の大小」から名がついたか。一応はそれで解決がつく。また、すべてオイナは、オイナ神^{カムイ}の自叙であるのに、「小伝」だけは自叙

する人が妹神であるということも、「小」と名がついた理由であるかも知れない。

ところが金成マツ刀自のユーカラ集を味読して感ぜられることは、「小伝」のラヴァフェアは、老母モナシノウク刀自、その他の女性たちの伝承の間に、段々進歩をして、知らず知らず発達していたものではなかったろうか。

「大伝」の方は、マツ刀自の付記に見えるように、幌別のカタイソウクの伝承であって老母の直伝を書いたのではなかった。どうもそのせいで、可なり形の変った「大伝」で、若しかしたら、この方は知らず知らずに忘失が手伝って、太初の形を可なりに退化させている伝承のようである。こうした結果が今の「大伝」「小伝」となったものであろうか。

II

「大伝」の第一段は、大事に育てられて成長することを述べることで、すべてのユーカラと同じである。みながみな、こうしてまず養育者をいうのであるが、一番の原形は、やはりカラフトのように、ヤイレスポ「自ら育つ児」（あるいはヤイレスクル「自ら育つひと」）であろうが、「自ら育つ」ということは、目に見えない神が育てて、育てていることなのである。すなわち、空腹になって泣いていると、そのうちに、ひとりである。食べたように、腹がよくなり、また空腹になっては泣いて泣いて、腹がよくなる。というふうにして、たった一人で育てていた、と考えるのである。その次には、やはり、カラフトでいうように、泣いてると、鷺が来て養ったというヤイレスポもある。日高の「神伝」では、戸外の^{カムイオイナ}大幣の神を「隣りの叔父」^{アウツケウス}と言って、それが時々山入りして鹿の肉などもて養うように述べているなどということもある。

この「神」が育てる観念が具体化して、日高の「神伝」(異伝Ⅱ)のよ

うに「日の女神」が育てていた、あるいは、この「大伝」の「姉神」が育てて成長していたというような叙述となるのである。これが粉本となつて英雄のユーカラの、みなし子のヒーローが、^{イレズユビ}養兄に、あるいは^{イレズサボ}養姉に、育てられて成長していた、という類の叙述になるのである。

第二段が、いよいよこの「大伝」の本文に入る。ここでの叙述は重要な序説で、つまり、ヒーローが、はじめて山入りして、ふと里川の上流で、岸の平岩の上に止まったと見る二羽の小鳥が、二少女になって会話を交わすのを、聞くともしに聞くと、自分のことを「^{なかばつちくさ}半分土臭・^{なかばくさくさ}半分草臭、^{しこくにやき}醜国焼・^{わるくにやき}悪国焼、^{おおわんだなあらし}大梔棚荒」と噂した。このあだ名は、悪口になっているとも知らずに言った乙女たちなのを、男でも許せないのに、女のくせに、われをかげ口も言うのに事欠いて、怪しからんことを言う、と憤慨して、斬り殺して帰宅はするが、腹を立てて、ふて寝をして食事もとらない、とこの物語の叙述が始まるのである。

さてこのヒーローのあだ名を乙女たちが知らずに口にして怒らすことをば、日高の方では「大伝」(^{ゴロオイナ}異伝Ⅰ)では語らない。日高の「大伝」は、この幌別の「大伝」のように、魔神のモシレチクチク・コタネチクチクがやはり出て来るが、ヒーローを怒らすあだ名を乙女たちがうっかり言う筋は、日高では、「大伝」にはなく、^{カムイオイナ}「神伝」(^{ゴロオイナ}異伝Ⅱ・Ⅲ)にある。

幌別には、^{カムイオイナ}「神伝」はなく、その代わりに、この「大伝」が、日高の^{カムイオイナ}「神伝」と^{ゴロオイナ}「大伝」とにあたる。

ただ、このあだ名のわけ、なぜオイナカムイが、この悪名をあだ名に持つかについて、幌別の「大伝」には物語られないから、ここを詳らかに語る日高の「神伝」が、ぜひ対照されなければならない。それでこれを書き添えた。

日高の「神伝」(^{ゴロオイナ}異伝Ⅱ)はいう。川下から来た乙女が、

^{おおわんだなあらし}『大梔棚荒・^{むなもとをべいかえ}胸元鍋抱のアイヌラックルをわたしが好きだから、この衣を送ろうと思う、お前は誰にやろうとするか。』

と云えば、川上からの乙女がそれに答えている、

『わたしの好きな男を、神々の中に、また人間の中に探してみた所、大椀棚荒・胸元鍋抱のアイヌラックルでなければ気に入らぬゆえ、それへやるのだ。』

アイヌラックルこれを聞いて口惜し涙を豪雨のように流した。

家へ戻ると、育ての女神がゆゆしく武装して、

『まことの首長に古い神の物語をするには装束しないでは、していけない。それで物の具を取り鎧うのである。さあ、父祖の昔語、神々の元のいわれを物語って聞かそう。どんなことをわたしが言っても決して腹立つな。ただ、突然に聞かすこともならないので、それでお身をわざわざ山へやって、乙女たちの問答を聞かせたのだ。』

と切り出して、天地開闢の話から語り出して、

『お身の父があらゆる神々を敵に回わして夜昼戦いをもち、食事をとる暇もなかったから、たまたま食事にありつく時には、棚の上をまぜ返して一番大きな椀で食う。それでも面倒だと、しまいには、鍋を胸の所まで抱え上げ、かぶりついて鍋飯を食った。それで大椀棚荒・胸元鍋抱という渾名がついた。また、火を燃やしたてで戦ったから国焼村焼という名もついたので。何れも決して決して悪いことで付いた名ではないから腹立つな。』

と教わる一条があって、つまり渾名を言った二人の乙女は、「神を顕わす役目」を演じているのである。

それが因で、アイヌの神々のパンテオンが物語られるのである。

この点、二少女のかげ口の重要な意味合いが、幌別の「大伝」ではすっかり忘失されて、ただ単純に立腹の原因となっているに過ぎない。

二人の乙女が、知らずにオイナカムイ・アイヌラックルの悪名を口に出す話は、日高では、いろいろな物語に出て来て、かなり普遍的な語り草である。

沙流の盲婦タウクノが伝承の「^{カムイオイナ}神 伝」(異伝Ⅲ)を、新冠の「^{カムイオイナ}神 伝」(異伝Ⅱ)の別伝として、参考に出しておく。なお、タウクノの今一つの「神伝」(異伝Ⅳ)は、「ポロオイナだか、カムイオイナだか。」と言って教えてくれたオイナの一つである。アイヌラックルの神婚説話であるとともに、アイヌ文化の起原を物語る、そしてアイヌラックルを文化神たらしめる重要な性質を帯びるオイナである。タウクノは、ワカルパの妻で、夫婦揃って立派な伝承者であったから、その伝承には傾聴すべきものであるから、ついでにここに出すものである。

Ⅲ

幌別の「大伝」の第三段は、養姉神が、アイヌラックルの立腹をなだめるために、悪口を言った二少女の村を激しく罰する。女性の姉神が、二つの村を荒らして、これで良いかと、帰ってアイヌラックルを慰めても、アイヌラックルの怒りは容易に解けず、姉神ももてあましてこの段が終わる。

一とたび怒れば、えらいものの怒りは、また容易でないことを示しているが、どうもそれ以上の高い意味をこの段から斟むことができない。

第四段は、姉神の大訓戒である。ただしそれは、国焼村焼云々の渾名のいわれやアイヌラックルの両親を話してくれる日高の方の大訓戒とは全く違って、ひたすらアイヌラックルの怒りをなだめ、それから、幌尻神とモシレチクチク・コタネチクチクとの戦いに蹶起させる訓戒である。

幌別の「大伝」は、モシレチクチク・コタネチクチクとの大いくさの物語であることは、大正十一年の昔にすでに知里幸恵嬢から承知していた。

日高の「大伝」(異伝Ⅰ)も、モシレチクチク・コタネチクチクとの大

戦であるから、両者の一致点に深く興味をもち、ぜひとも、お祖母さんのモナシノウクさん自身の「大伝」を聞きたいと望んでいたが、その機を得ずに永別した。

ところが、金成マツ刀自が、昭和九年カタイソウクから筆録されたこの「大伝」では、同じモシレチクチクでも全く異なるモシレチクチクだったのに驚いた。日高の「大伝」のモシレチクチクは、日神を幽閉して天下がそのため真暗闇になる。アイヌラックルがそれを救うために討つモシレチクチク戦である。

同じ「大伝」でも、それだけの異同があるからそれで、この書に、日高新冠のサンキロット(和名留吉)伝承の「大伝」(異伝Ⅰ)を対照的に掲載することにしたのである。

第四段の大訓戒の後段に、いよいよアイヌラックルの蹶起を促す事件は「小伝」と同じように、やはり幌尻神に深く関係するが、内容は「小伝」とは少しも関連がない。

幌尻岳の山中に、神境があって、そこの幌尻沼は昆布が生えているとか、海の魚もいるとか、沼の主は蛇躰であるとか、その蛇躰はサクシヨモアイェプ(「夏・言わぬ・もの」、冬は弱い、夏は恐るべき強猛なもの)といわれる怪物であるなど、いろいろなことがいわれる。

幌別の「大伝」では、この沼にアイラク・スプライライエという小魚(矢のように速い魚で、容易に捕まらない故の名)がいっぱいにいて、容易につかまえられる。これをつかまえて、人界へ放つと、人界の河海に鮭・鱒が満ち、山野に熊・鹿がいっぱいになるという。幌尻岳の神が、退隠して天上へ帰るために、そのあとがまに、アイラク・スプライライエ魚を捕え得た人を、すえるときめたから、遠近の神々の、捕えようとする神々、見物する神々、大さわぎであるが、誰もこの魚を一尾も捕ることができず疲れ死に死んでしまう。幌尻神のこの悪い布令のため、神神が死に絶えそうだから、姉神が、アイヌラックルへ『お身が行かなけ

れば人間界があぶない。さあ起きて、沢山食事を取って出かけなさい。でないと大変だ。』とすすめるので、アイヌラックルが、夢から覚めたように「成る程」と思う。と第四段が終わるのである。

IV

第五段は、やっと起き上って装束をし、神駕を取り卸ろして、それへ坐乗し、^{ばち}撥をもって打ち打ち、神風を駆って、'空中を殷々と鳴りとどろかして幌尻へ向う。

幌尻へ着いて、幌尻神に挑まれてアイラク魚を捕えて人界へ放つ、人界がいっぱいの獲物に満つ。それで、幌尻神は、モシレチクチクと決戦して勝ったものを幌尻の主、人界の長と認めるとあおり立てて、ここにモシレチクチクとたたかうのであるが、久しく食事を取らなかった身の衰弱にかてて加えて、不運にも、宝刀が鰐元から折れて無念の涙にかきくれる所で第五段が終わる。

第六段が、「折ふし、思いがけなく、遠方に大きな爆音が響いて、えらい神のやってくる音がした。」と始まって、このアイヌラックルの危機一髪の所へ、シヌタプカの少年英雄が、救援に現われる。

これは、驚くべき筋合である。オイナ神^{カムイ}の物語の中へ、ユーカラ神^{カムイ}の出て来るとは。

この点からも、幌別のこの「大伝」は、後世の変形した伝承でなければならず、それにつけても、モナシノウク刀自直伝の筆録でなかったことを惜しまざるを得ない。

オイナ神^{カムイ}の物語とユーカラ神^{カムイ}の物語とは、もとより別系統の説話で、前者は、日高の沙流川沿岸地帯を中心とする物語であり、後者は、石狩を中心に、西海岸地方を舞台に発達した物語で、二つは混ずべからざる領域のものである。

ただし、何れもが久しく伝承されて、永い間に、伝承者の頭脳の中で握手してしまうことも、ありがちのことで、避けがたい伝承の事実だったろう。

沙流の盲詩人で、わたしが「アイヌのホメロス」と感歎したワカルバ翁などは、時として悲憤して「今時のものが、この二つを混同して、同じ話の中へオイナ神とユーカラ神とが顔を出すことがある。古老の伝にはないことだ。」と言いながらも、翁の頭の中でも、この二つのヒーローが握手して、同じ母から生まれた兄弟であったような昔話をしたことがあったのである。

『^{リタンカント ノチウオカント}上天は星居の空で、^{ランケカント ウラロカント}下天は雲居の空である。雲居の空の神の娘を、天津日の神が見て好い子だなあと思って通った。神の思いが、そのままに止むのは勿体ないから、それだけで娘が妊娠をする。夫もないのに誰の胤を孕んだかと、兄に責められても責められても知らない知らないと言う。そのために、天を追われ、人間界へ下りて生み落としたのは赤と白との二つの玉だった。それが割れて生まれた二児の赤い方が兄のオイナカムイ、白い方が弟のユーカラカムイ、それが、東と西の頭領になるように育った。』と。

この類の話は他にもあった。自然に結びついた話であろう。

幌別の「大伝」の、戦闘の間に一が一を赴き助ける筋は、これよりは手のかかった結合で、後世的のものではあるが、やはりおのずから生じた結合であろう。

この段の結末は、更に驚くべきことである。モシレチクチクを斬ったあと、ユーカラ^{カムイ}神ははじめてオイナカムイを「年若きわが兄」と呼びかけて、救援に來た趣を告げたあと、自分はアイヌからも神々からも、そねまれるから、この国土を去ると告げ、何かあったら又来て助力をする^{カムイ}と約束をし、刀一振を片身にくれて永遠にアイヌの国土をあとに隣国へ去ってしまうという結末なのである。